

いのちを与え、さばきを行われる主

ヨハネ福音書5:24-29

【新改訳2017】

- 5:24 まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています。
- 5:25 まことに、まことに、あなたがたに言います。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。それを聞く者は生きます。
- 5:26 それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにして下さったからです。
- 5:27 また父は、さばきを行う権威を子に与えてくださいました。子は人の子だからです。
- 5:28 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。
- 5:29 そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。

【祈りながら考えよう】

- (1) 霊的死人である人は、どのようにしたら、主から永遠のいのちを与えられますか。
- (2) 主イエスを信じる者が「さばきにあうことがない」のはなぜですか。
- (3) 27節で、さばきを行う権威が、人の子なる主イエスに与えられたというのはなぜですか。

【解説】

(1) 永遠のいのちを持つ道

主イエスは「まことに、まことに、あなたがたに言います」と言ってこの節を始め、これから言おうとされることの重要性に注意を喚起された。

① 霊的に死んでいる人

《わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています》(24節)

この24節で「死から」と言われているのや、次の25節で「死人が神の子の声を聞く時が来ます」と言われている時の「死人」と、28節のところ、「墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです」と言われている時の「墓の中にいる者」とは、全然別のことを指している。

後者の場合は、いわゆる「死んだ人」のことであるが、前者の場合は、「霊的に死んでいる人」のことである。「霊的に死んでいる」ということは分かりにくい。しかし、このことが分からないと、聖書が教えている「救い」とか、「永遠のいのち」ということは、全く分からなくなってしまう。

この「霊的死」とは、パウロが次のように言っているところに、はっきりと出て来る。「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって…」(エペソ2:1)。

この「罪過と罪の中に死んでいる」とは、何が善であり、何が悪であるかが分かっているにもかかわらず、善を行うことができず、悪を行ってしまう者である。パウロはそのような姿の自分を、「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」(ロマ7:24)と叫んでいる。

私たちにとって最も大きな悩みは、このことではある。善をしなければならないという思いはあっても、それに反したことをしてしまう弱さのために、悩んでしまう。ある人は、悩んだところで、できないのだから無駄だと考えているかもしれない。

しかし、いくら打ち消してみても、私たちの「良心の呵責」を全く否定してしまうことはできない。罪を繰り返し犯し続けることによって、良心は次第に麻痺し、それほど呵責を覚えなくなるかもしれない。しかし、全く呵責を覚えなくなることはない。

② 聞くことから始める

霊的死人である私たちが、永遠のいのちを頂くには、「神の子の声を聞く」(25節) ことから始めなければならない。

「神の子の声」は、私たちが聖書を読む時、また集会でメッセージを聞く時、聖書の言葉を通し、また人間の語る説教の言葉を通し、御子が私たちの心に語りかけてくださる。その御声に「聞き従う」ことである。

聖書が「聞く」と言う場合、「信仰は聞くことから始まります」(ロマ10:17)とされている通り、また「信仰をもって聞いたから」(ガラテヤ3:2)と



いる通り、それは「聞き従う」ことを意味する。つまり、聞きっ放しとか、ただ聞いておくといった程度のものではない。聞いて信じることである。信仰とは、実にいのちがけのものである。

③ 信じて従う時のいのちを与えられる

《父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにして下さったからです》(26節)

これは、私たちが御子イエス・キリストの御声を聞き、それに従う時に、いのちが与えられる理由である。私たちは自分のうちにいのちを持っていない。だから、御子から離れたのでは生きることができない。

それはちょうど根を張った一本の木と枝のようなものである。イエス・キリストは根を張った一本の木のように、いのちを持っておられる。私たちはその枝に過ぎないから、キリストに結び付かない限り、いのちはない。

現在、御子イエス・キリストの御声を聞いて、御子とのみわざを信じれば、キリストに結び付けられ、いのちが与えられる。

これは、信じた者は、その時から栄光に満ちた永遠のいのちへの完全な権利書を手に入れており、罪なき者とされ、赦され、義とされ、今、この地上にあってさえも、天の御国を受け継ぐ者とされていることを意味する。

④ さばきにあうことがない

主イエスを信じる人は、キリストがその罪の刑罰を十字架で支払ってくださったゆえに、さばきを受けないで済むのである。神はこの刑罰の支払いを2度も要求される方ではない。キリストは私たちの身代わりとしてそれを支払われた。キリストはそのみわざを完了された。完成したみわざにつけ加えるものは何もない。

キリスト者は自分の罪ゆえに罰せられることは決してない。最後の日の審判を思っても、恐れることは全くない。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」(ロマ8:1)。

「御子を信じる者はさばかれぬ」(ヨハネ3:18)と保証されている。何と感謝なことか。

⑤ 死からいのちに移っている

《信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています》(24節)

これは、信じる者は霊的に死んだ状態から、霊的にいのちある状態に移っているという意味である。回心の前は、罪過と罪との中に死んでいた。「神の愛や主との交わり」という点で死んでいた。それが、信仰をイエス・キリストに置いた時に、神の御霊を内に宿す者とされ、神のいのちを所有する者となった。罪に死んでいた心は、今や新しくされ、神との交わりの中で生きている。

この「現在性」に注目する必要がある。永遠のいのちは、信じた瞬間から、信仰者が、現に所有しているものである。将来最終的に手に入れるというものではない。信じた者は、この世にあるうちからすでに、永遠のいのちを持ち、死からいのちに移っている。ハレルヤ!

(2) 何によってさばかれ選別されるか

《また父は、さばきを行う権威を子に与えてくださいました。子は人の子だからです。

このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます》(27-29節)

「父はさばきを行う権威を子に与え」とは、主は、人の性質をご自分の身に負い、人として生まれた。そして、全人類の罪を負い、十字架で身代わりにさばかれ死なれて、すべての人の救いの道を備えられた。人の子として、人の性質を持たれたゆえに、また人の弱さを知られるゆえに、さらに人のために身代わりとなられ、苦しめられたすべてのことのゆえに、御子は、「人のさばき主」となるに、三位一体の中で最も適当でふさわしい位格であられる。

《善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受ける》(29節)

このさばきは選別である。最後のさばきの基準は、善行を行ったかどうかという「わざ」によるものであると言っているのではない。

29節は、「善を行った者」がその善行のゆえに救われ、「悪を行った者」がその邪悪な人生のゆえに罪に定められる、と教えているのではない。誤解しないで欲しい。

聖書は、人は「善行」をするから救われるのではなく、救われているので「善行」をするのであると教えている(エペソ2章)。「善行」とは、救いの根ではなく、実である。原因ではなく、結果である。

「悪を行った者」とは、主イエスに対して「信仰と信頼を全くおくことがなかった人」のことを指す。従って、神の目から見てその人生は悪いものであった、ということなのである。このような人々は、よみがえりを受けた後、神の前に立ち、永遠の破滅(ゲヘナの火の池)に投げ込まれる。

この世の終わり、つまりキリストが再臨される時、信者も不信者も復活する。人が死ぬと、霊と肉体との結合が解かれて、肉体は地の塵に帰るが、霊はそのまま存在し続ける。

信者の霊は、パラダイスに行き、主イエス・キリストと共にいて、そこで体の復活を待つ。そしてキリストの再臨の時、朽ちることのない霊的体が与えられて、永遠に天の御国で神の祝福のうちに生きることができる。

それに反し、不信者は死ぬと、その霊はハデス(よみ)に行き、苦しみながら、体の復活を待つ。そしてキリストが再臨されると、霊的体が与えられて、永遠に祝福の源である神から切り離されて、地獄(ゲヘナの火の池)の苦しみを味わい続けなければならない。

